

『げろびーといっしょ』

著作 a s h

※この話は『kanon』を元にした二次創作です。

1、水瀬家の朝

水瀬家の朝は、秋子さんから始まる。

家族の中で一番早く起きて、洗濯に掃除に朝食の支度までも完璧にこなし、家事やつれなど微塵も感じさせないのだから、主婦のががみとも言える存在である。

秋子さんが一通りの家事をこなし、朝食の準備にかかっている頃。

いつものように、名雪の部屋では目覚ましのオンパレードが開始される。

『ジリリリリ…』

と、無機めかつ面白みのない音が響いたかと思うと、

『ピピピピピピピピピピッ…』

と、これまた面白みのない音が続く。

『おい、起きろよ！ 朝だぞ！』

さらにはあまり通りのよくない合成音の掛け声が続く。

しかし、これらの目覚ましをセットした本人は、一向に起きる気配もなく、大きなカエ

『げろびーといっしょ』

ルのぬいぐるみを抱いて眠りこけていた。

だが――

「おいっ！」

ばしッ――

「……うにゃ？」

「いい加減にしろよ！」

べしッ――

「……うく、痛い……」

「毎度毎度こんなのにつき合わされるオレ様の身にもなってみろッ」

「……うにゅう……」

誰かに頬を叩かれた感触に、名雪が目をごすりながら、自分の周りを見たが声が出たよ
うな気がする割には部屋には自分しかいなかった。

「……祐一なの？……」

ぼーっとする視界の中、名雪が部屋のドアの方を見たが、やはり誰かがいたような気配
は感じられない。

「……わたし……寝ぼけてるのかな……」

頭だけを動かしてとろんとした目つきで、もう一度周りを見回した後、

「……うん、そうだね。やっぱり、まだ眠いよね……」

と言ってベッドにころんと倒れた時――

「――ッてえじゃねえか！」

誰かの声が自分の下の方から聞こえたのだった。

「うにゅ？」

どうして声が自分の下の方から聞こえるの？ と寝ぼけた頭で一生懸命名雪は考えたが、それがまともな思考になるはずもない。

これは夢なんだな、と実に都合のいい解釈だけを残して、名雪は特に気にする様子もなく、また目を閉じていった…。

「—このアマあ、いい加減にしやがれってんだよッ」

が、声はやはり自分の下の方から聞こえてくる。

何か変だな…と、ようやく不審に思い始めた名雪が、自分の下にあるものを確認しようと目を開くと、そこには—

「いよう、ねえちゃん。ようやくお目覚めかい？」

「……………」

名雪の下にあつて、今しがた自分に向かって何か言葉を発したそれは—緑色のふさふさした手触りがあり、だらしなく伸びた手足と、大きな顔。そして、その顔にはまん丸の目玉…いや、かなり恐ろそうな三白眼があつた。

さらにそいつは言葉を発する。

「どうでもいいけどよう、いい加減に目覚まし止めてくれねえか？」

「……………うん……」

自分に向かって物を言ってるそいつが何であるか。そんなことを考えている余裕がなかったのか、あるいはまだよく分かっていないのか、名雪は言葉を失いつつもベッドから

起き出して、目覚ましを一つ一つ止めていった。

そして、ようやく喧噪が途絶えた時だった。

名雪はそっとベッドに近寄り、そいつに向かって声をかけた。

「…げろびー？」

そう、さっきから名雪に乱暴な物言いをしていたのは、名雪が大事にしていたカエルのぬいぐるみのげろびーだったのだ。

「……わたし、おかしくなっちゃったのかな……」

ベッドに横たわった状態のげろびーを見つめながら、名雪がそっとつぶやくと、不意にげろびーがむくりと起き出した。

「いよう、それは違うぜ、ねえちゃん」

起き出したと同時にげろびーの目つきが、さっき見たように三白眼になっている。

「えっ？」

驚きのあまりに言葉を失う名雪。ようやく事態の異様さが分かってきたらしい。

「オレ様はよう、げろびーなんてふざけたヤツじゃあないんだぜ」

「……け……」

げろびーが喋っている、と言うだけで十分におかしな話なのだが、その時の名雪にとっては、げろびーが乱暴な言葉遣いをしてるの方がショックであり、思わず言葉を詰まらせてしまった。

「オレ様はげろびーってんだ。覚えときな、ねえちゃん」

びっと親指（と言ってもカエルのぬいぐるみなので、はっきりとは言えないが）を立て

で、足を組んでみせるげろびーを目の前にして、名雪はまともに言葉を返すことが出来ず、ただ口をばくばくさせるだけだった。

「……」

だが、当のげろびーの方はそんな名雪に構うことなく、ベッドからびよんと飛び降りて、名雪の周りを歩きながら言葉を続けた。

「まったくよお、何をそんなに呆けてるんだあ？ オレ様がこうして動けるようになったのだって、みーんなねえちゃんの望んだことじゃねえかよ」

その言葉にはっとして目つきの悪いカエルのぬいぐるみを見つめる名雪。

「…で、でも……」

わたしはこんな目つきの悪いのなんて望んではいない…そう言いたかったがそれよりも先にげろびーが言った。

「いやあ、ねえちゃんの言いてえこたあオレ様にも分かるぜ。だけどよう、神様にも都合ってもんがあるんだな、これが。ねえちゃんが『げろびーと話ができたらいいな』なあって、純真なおトメにありがちな陳腐で取るに足らない願いなんざあ、世の中いくらでもあるわけだ」

「…陳腐じゃないよー」

「まあ、いいから聞きなつて。でだ、それを叶える方もいい加減ウンザリしてたわけだな。そんな願い事を思う奴が一つでも減ってくれば…と言う理由から、ついにそれらの願いに対して、ある種のペナルティを与えることにしたってわけだ」

「うー…そんなの嬉しくないよ」

『げろびーといっしょ』

「何言ってるんでい？　ねえちゃんはちゃんとオレ様と話が出来るようになったじゃねえか。そんなことを言ってるちゃ、罰当たりってなもんだぜ？」

「…わたしが話をしたかったのはげろびーだもん」

「かぁー、これだからねえちゃんは困るぜ！　今まではオレ様が何も答えられなかったから、ねえちゃんのされるがままだったけどよう、オレ様もてめえの意思ってのを言えるようになったんだから、そんな甘っちょろい名前はやめてくんナッ」

「げろびーがいいよ」

「うるせいッ！　だいたい、そんな名前がオレ様に合ってると思うかい？」

「うー……」

目の前にいる目つきの悪いカエルのぬいぐるみにはどうしても、げろびーなんて可愛い名前は似合いそうにない。

「な？　そおゆうこった」

「げろびーがいいよ」

がくりと肩をおとしてしまった名雪に、意外にもげろびーはポンと名雪の肩に手を置きながら慰めるように言った。存外悪いヤツでもなさそうだ。

「まあ、そんなに氣い落とすな。オレ様だって、ずっとねえちゃんのそばにいられるわけじゃねえしよ」

「本当？」

「って、あからさまに嬉しそうにすんじゃねえよ」

「あーごめん……」

『げろびーといっしょ』

「ま、いつかはただのぬいぐるみに戻るってさ」

「いつかって、いつ？」

「そりゃ分からねえよ。神様にでも聞かねえとな」

「うー…げろびー…」

名雪はかつて自分が大事にしていたぬいぐるみの名を呼んだ。だが、その可愛らしい姿は今はなく、目つきの悪い乱暴なヤツが目の前にいるだけである。

「ま、仲良くしようぜ」

そう言って目つきの悪い乱暴なヤツ…げろびーは、バンバンと名雪の背中を叩いた。

名雪の方は、まだ少しはつきりとしめない思考の中で、これからどうなるんだろ？ などと考える余裕はなく、

(げろびーなんて名前、可愛くないよ…)と、それだけを思っていた。

しばらくそんな調子でぼんやりと過ごしてしまったが、ふと思いついたようにげろびーがポンと(音が実際にしたかどうかは不明だが)手を叩いた。

「おっと、そうだった。これだけはちゃんと言つとかねえといけねえんだ」

「なに？」

「オレ様がげろびーでいられるのは、ねえちゃんと一緒にいる時だけだぜ」

「ええ？ じゃあ、わたし以外の人には…」

「ただのぬいぐるみだ」

「うー」

『げろびーといっしょ』

何でわたしだけがげろびーに会えなくなるんだろう？ 世の中不公平だ：などと考えるつ、げろびーを見つめる名雪だが、げろびーはそんなことも構わずに至って普通に尋ねてきた。

「それよか、ねえちゃんよお。時間はいいのか？」

突然現実を引き戻されるように、げろびーの言葉に時計を見ると、目覚ましが起こしてくれるはずの時刻からすでに二十分が経っていた。

「あつ……よくないよー」

「じゃ、急げよ」

「うー、何だか冷たいよー」

「オレ様が急いだところでどうしようもあるめえ？」

至極もつともな反論をされてしまい、慥然としながらも名雪はゆっくりと（本人は結構急いでいるつもりなのである）着替えを始めた。

「あつ……そうだ。げろびーは見ないでよ……」

パジャマを脱ごうとした時、思い出したようにげろびーに告げる名雪。が、げろびーは何も答えずに、いつの間にやらベッドにころんと横たわっているだけだった。

「……もう、ぬいぐるみに戻っちゃったのかな……」

そつとつぶやきながら、げろびーの様子をしばらく眺めていたが、また時間のことを思い出して、名雪は意を決したようにげろびーに背中を向けて着替えを始めた。

ちなみに、その時のげろびーは別にただのぬいぐるみに戻ったわけではなく着替えの時のアレコレ口を出すと、また余計な騒ぎになると分かっていたためであり、一見乱暴にし

か思えないがそれなりに気遣いはしてるのである。

そして、片や名雪のトロ臭さに呆れ、片や変なぬいぐるみの性格に呆れ、奇しくもその時、二人（一人と一体）は、

（やれやれ……この先が思いやられるな…）

と、同じことを思っていたのである。

名雪が着替えて一階に下りていくと、まず最初にいつもの笑顔を見せる秋子さんが、そして少し奇立ちを見せる祐一がいた。

「おはよう」

「おはよう、お母さん…」

「遅いぞ、名雪。もうメシ食ってる時間はないからな」

「ええ？　もうそんな時間なの？」

情けない表情をして名雪が祐一に言ったが、それは時間がないから困ってるのではなく、朝食抜きになることに對しての文句である。が、祐一もその辺はわかまえているので、すぐに続けて言った。

「まあ、走っていくならパンを一枚くらい食ってく時間はあるぞ」

すると、名雪はそれに対して祐一ではなく、秋子さんに向かって告げた。

「お母さん、わたしのコーヒーは？」

そう言いながら、食卓の自分の定位置に座る。と同時に、秋子さんも分かっていたのか、名雪の方にトーストの乗った皿とコーヒーを差し出してくれる。

「本当にもうちよつと早く起きられないかしらね」

「うー…今日は寝坊したわけじゃないもん…」

「はいはい」

けるびーがいきなり目つきの悪い可愛くないぬいぐるみになっちゃったことが悪いんだよ…との言葉を出さなかったのは、それを言っても信じてくれないだろうし、そんなことよりも朝食の方がさしあたって重要だったからだ。

そもそも普通に考えてみれば、名雪と言う女の子は実に今どきの女子高校生らしからぬ存在である。午後九時に就寝して、そのまま朝までぐっすり眠りこけて、朝食はちゃんと摂ると言う生活習慣は立派と言うよりは、すでに希少価値があるだろう。さながら、絶滅危機種に指定されている珍獣と言ったところだろうか。

「わたしはパンダじゃないよ」

「？ いきなり何言ってるんだ、名雪。お前まだ寝ぼけてるのか？」

「何でもないよ…」

そんなこんなで、簡単に朝食をすませて、名雪と祐一の二人は走って学校へと向かった。ともあれ、これもいつもの光景ではあった。

「いつもじゃないよ…けるびーがあ……」

「？ 名雪、いきなり誰に向かって言ってるんだ？」

だいぶ走り慣れた道を疾走しながら、祐一が怪訝そうな表情で名雪に尋ねたが、名雪はそれに答えずにただ学校へとさらに足を速めるだけだった。

「あつ、きたねーぞ、名雪」

「祐一が遅いんだよ」

「お前が朝メシ終わるのを待ってたんじゃねーか！」

「わたしそんなこと頼んでないもん」

それだけ言いうと名雪は、必死に追いつこうとする祐一の前に出た。さすがに陸上部部長の看板は伊達ではない。

「おーい、名雪い……」

祐一も必死に走るが、少しずつ距離が開いていく。が、ふと祐一は走りながら、笑みを浮かべていた。

「おーい、名雪ッ！ あんまり元気に走るとなあ」

少し後ろに祐一の声を聞きながら、名雪のペースは変わらない。だが、次の言葉を聞いた瞬間、名雪の動きがピタッと止まった。

「パンツ見えるぞ」

「えっ？ わっ……だっ駄目え！」

慌ててその場に足を止め、スカート下の裾を押さえる名雪。

「えらく派手なのはいてんだな、お前」

「違ふよ、今日は白の無地だよ」

「そうか、今日は白か。じゃあな」

勢いを変えることなく、名雪の横を走り抜ける祐一。

「あっ……」

そこでようやく祐一に騙されたことに気がついた名雪だったが、もう後の祭りである。ただでさえ、名雪の着ている制服はスカート部分の裾が短い上に広がっているのだから、

走ってればそりゃ見えても不思議はない。そんな少女の恥じらいにつけこむとは、非常にいやらしい作戦ではあるが、同時に非常に有効な作戦でもある。

「祐一、ずるいよ」

と、名雪が不平を漏らしてみても、当の祐一はすでに名雪のかなり先に行ってしまった、その声が届くことはなかった。

「うー…」

遠くなりつつある祐一をにらみながら、名雪は再び走り出した。ただし、先ほどまでと違い、大きく足を蹴り上げるような走り方ではなかったので、少し速度が落ちているのは確かだった。

一度意識してしまった以上、いかに名雪とてなりふり構わずに走るのとは出来ないと言うものだ。が、それでも、どうにか遅刻だけは何とか免れるくらいに学校に着いたのは大したものだ。

2、水瀬家の夕

その日の名雪は、あらゆる意味で不幸の連続だった。

まずは朝食をゆつくりと食べられる時間がなかったのも、いつもより量が少な目であったこと。

走って登校するのはいつものことだが、祐一の姑息な手に引っかけたり、自分で下着の説明をしてしまい、挙げ句には遅刻ぎりぎりになってしまったこと。

一息入れようと思ったら、その日は日直に当たっていて、あれこれと片づけなければならなかったこと。

朝食が軽めだったせいで、三時間目の中ほどから空腹感を感じてしまい、授業どころではなくなってしまうこと。

空腹を感じているところに、四時間目は体育だったこと。

待ちに待った昼休みも、着替えを終えて学食に行った頃には、めぼしい物がなくなっていたこと。

その結果、空腹であったのに食べたいものが食べれないと言うジレンマに陥り、依然すつきりとしなかったこと。

放課後になったら、イチゴサンデーの二杯や三杯をべろっと行きたいところだが、その日はもちろん部活があるので、それもままならないこと。

…と、名雪にしてみれば、まさに不幸この上ない状態の連続だったのだ。

結局は陸上部の練習が終わるまで、ずっと空腹を感じていたが、さすがに帰る時間に

『げろびーといっしょ』

なってしまうと、寄り道するよりはまっすぐ家に帰った方がいいと思い、名雪は練習が終わると本当にまっすぐと家に向かった。

「ただいまあ〜……」

力を入らない声で名雪が家になると、台所の方からエプロン姿の秋子さんが姿を見せ
て、

「お帰りなさい、名雪」

と返事をする。もちろん、いつもと同じ笑顔で。

「お腹すいたあ……」

秋子さんのエプロンに気づくと、名雪は一層情けない声を上げたが、秋子さんは動じる
こともなく笑顔で答えるのだった。

「すぐにご飯にするから、あなたは着替えてらっしゃい」

「うん……」

歩くのがやっと言うくらい足の取りで、名雪は自分の部屋へと向かった。そして、名雪
が部屋に入るなり、目つきの悪いカエルのぬいぐるみがベッドから体を起こしながら言っ
た。

「よお、遅かったな、ねえちゃん」

「うっ……」

途端に名雪はその場にドツと崩れ落ちてしまう。

「どうしたってんでい？ そんなに部活を頑張ったってえのか？」

「うー……それもあるけど、違うよお……」

部屋の入り口のところに座り込んだまま、名雪が力なく答えると、げろびーもベッドからぴよんと飛び降りて、名雪の方に近づいていく。ちなみに、その時は器用に二本足で歩いていたのだが、名雪はそんなことに特別何かを思うほどの余裕はないらしい。

「みいーんな、けるびーが悪いんだから…」

自分に向かって歩いているカエルのぬいぐるみをほぼ真正面にして、名雪がつぶやくように文句を言うと、げろびーの方も負けてはいない。

「おっ？ いきなり、オレ様のせえにするのかい？」

だが、名雪の方も負けじとべたんとその場に腰を下ろし、げろびーに言い返す。

「だって、本当にけるびーのせいだもん」

「いってえ何がオレ様のせえだってえんだよッ」

相変わらず乱暴な口調でげろびーが答えると、名雪は途端に弱気になり始め答えづらそうな表情のまま固まってしまった。

「……」

元はと言えばげろびーが悪い、と言う気持ちはもちろんあったのだが、名雪はそれ以上の言い分を用意していなかったのだ。しかし、げろびーは違う。

「だいたい、今朝遅れたのだから、ねえちゃんがボーっとしてるからいけねえんで、オレ様のせえじゃねえぜ」

「でも…いきなりぬいぐるみが喋ったら、誰でもびっくりすると思う…」

「ねえちゃんは全然びっくりしてるようにゃあ見えなかったけどな？」

「うー、そんなことないよ」

と、げろびーの意見を否定する割には、名雪の語調は強くはない。びっくりしてるのはつきりと分らないほど、とぼけているつもりは名雪自身はないのだが、香里や祐一にはよくそう言われているだけに、ここでも強く言えなかったりするのだ。

「そうか？　んでもよお、オレ様のことを平然と受け止めてから、ねえちゃんが一人でポーっとしてたのはホントだがな？」

朝の様子を思い出すようにげろびーがピツと指を立てながら言うと、名雪はそれについても否定を試みる。

「だから、平然と受け止めてたわけじゃないよ。いきなり、げろびーが変になっちゃったから、わたし本当にびっくりしたんだよ」

だが、どうにも話の論点がずれているのは否めない。少なくともげろびーに反論するのであれば「ポーっとなんかしてないよ」と言うのが筋だろう。

「ま、そんなところは相変わらずって感じだな、ねえちゃんはやお」

「やっぱり元のげろびーがいいな、わたし…」

「そんなこと言ってもしょうがねえ、って言ってるじゃねえか」

「…げろびー……」

もはや名雪にまともな論理展開は出来そうにないと判断したのか、げろびーは未だに入り口のそばで座り込んでいるままだった名雪に対して、

「どうでもいいけど、そのまんまじゃあ晩メシ食えねえけど、いいのかい？」

と、極めて現実的な質問をしてみせた。

「あっ……うー……お腹すいた……」

『げろびーといっしょ』

げろびーに言われた途端に空腹を思い出したように、名雪は一層情けない表情を作って、ころんと前に倒れ込んでしまう。

「制服のまんまでそんなことしてると、しわくちやになるぜ」

またもげろびーに極めて現実的な指摘をされてしまったが、それでも名雪は積極的に動く気配を見せなかった。と言うより、本当に動く気力がなかったのかも知れない。

「起きあがれない……」

と、小さくつぶやきを漏らすと、そっと目を閉じてしまい、さらに動く気配を感じさせなくなっている。もし今、名雪の部屋に誰かが入ろうとしたら、きつと部屋の入り口でーんと鎮座している妙な物体に驚くだろう。：いや、秋子さんはそんなことで驚きはしないが。

「チツ、しゃあねえな」

不意にげろびーは短く告げたかと思うと、そのふさふさの体を名雪の顔の下へと潜らせていった。

「え……」

一体何をするのかと疑問に思っていたのかどうかはよく分からないが、とにかく名雪は突然のげろびーの行動に小さく声を上げた。が、げろびーはそんなことには構わずに、名雪の体の下にずんずんと潜っていく。

「あっ……」

思わず名雪が声を上げたのは、げろびーが自分の体の下すなわち胸の辺りでもぞもぞと動いていたからであるが、当のげろびーは別に名雪の胸をもてあそんでいるつもりはない。

『げろびーといっしょ』

「げろびー？」

さっきまでとは異なり名雪は少だけ顔を赤らめ、自分の下にいるげろびーに向かってそっと声をかけたが、返事はない。が、返事の変わりに、唐突に名雪の体が大きく動き始めたのだった。

「あれ？」

思わず間拔けな声を上げてしまう名雪だが、徐々にはあるが自分の視点が高くなっていくのは分かった。しかし、自分で動いたのではない。

「げろびー…なの？」

自分で動いてるつもりじゃないのだから、他に選択肢はないはずだ。と言うことに気がついた時点でようやく名雪は、げろびーが自分の上体を持ち上げてくれていることが分かったのだ。

「ふう、結構重いもんだな、ねえちゃんも」

「わたし、そんなに重くはないよ…」

「っと、それだけ言う元気があるなら、後はためえで起きてくれねえか？」

「あっ…うん」

ようやくそこでげろびーの補助を離れて、名雪は立ち上がることが出来た。が、すぐにベッドに腰を下ろしてしまう。

「さっさと起きあがって、着替えて、メシにすんじやなかったのかよ？」

すぐにげろびーに注意されてしまったが、

「うん…」

と、はっきりしない返事をするだけで、名雪は動こうとはしない。別段動けないわけではなく、先ほどのげろびーの行動に対して戸惑いを感じていたのである。

「オレ様に着替えを見られたくねえってんなら、安心しな。朝と同じように、オレ様は見ねえフリをしてやるからよ」

「うん……」

名雪の返事は相変わらずだ。ちなみに、げろびーの言いようからすると、朝にしてもこれからにしても、着替えは見てる（見てた）と言うことになるのだが、名雪はそんなことに気が回るようなタイプではないし、今は別のことで頭が一杯なのだった。

もっとも、はた目に見れば、何も考えてないようにしか見えないのが名雪である。それが本人にとって、不本意だろうが何だろうが、そうとしか見えないのだから、しょうがない。

だが、不意に名雪がげろびーを見つめて、つぶやくように言った。

「……ありがと……」

それは自分を起こしてくれたことに対するお礼なのだろうが、前後の文脈から察するとそうとも言えないのが困りものである。しかし、げろびーは名雪の言葉の意味をちゃんと分かっているらしく、

「とっとと着替えてメシでも食ってきなって！」

言い放ったと同時にくるっと名雪に背を向けて、机の方に歩いていったかと思うと、びよんと椅子に乗って動かなくなった。名雪が着替えをする間は、何も動かない……と言った通りのことを実行したまでだ。

椅子の上で動かなくなったげろびーを見て、名雪はゆっくりと着替えを始めたが、ふとげろびーのぶしつけな行動と乱暴な口調の裏にある優しさをかみしめるように感じていた。

(何だか……祐一みたい……)

軽口を叩いて話をはぐらかすばかりなのに、ちゃんと自分のことを見てくれている祐一と、今までのげろびーの行動を重ねて、何となく自然に名雪の口元がゆるんでいた。

「それじゃ、行って来るね」

着替えを終えると、名雪は椅子の上のぬいぐるみに向かって、笑顔で告げると一階へと下りていった。

名雪の言葉にげろびーは何も答えなかったが、名雪が一階へ下りてしばらくした頃、むくりと体を起こして、主のいなくなった部屋をきよろきよろと見回し始めた。

そして、名雪の机の上にあった鏡を見つけると、誰に言うでもなくその鏡に向かって話し始めた。

「フツ…、ちゃあんと育ってるじゃねえかよ。これなら、一つ目の心配は消えたってワケだよな？ なにい？ まだ安心できねえってか？」

誰かと話しているような口振りだが、鏡には目つきの悪いカエルのぬいぐるみしか写っていない。

「ったく、オレ様だっつてずっとこうしてられるワケじゃねえんだし、もう一つの方を片づけたら、それでおしめえだからな」

相変わらず鏡には目つきの悪いカエルのぬいぐるみが写っているだけで、当然のごとくそこには鏡の通りの姿があるだけだ。しかし、

『げろびーといっしょ』

「でもよお、オレ様もアンタも苦勞性だよな、ホントによう」
鏡に向かってそう言ったほんの一瞬だけ、そいつは笑っていた。

3、らぶらぶ

けるびーがげろびーになってから、あっと言う間に一週間が過ぎた。

その間の名雪の生活にこれと言って変化もない。

毎日大量のアラームとげろびーの叱咤で起こされることに始まり、大好きなジャムをたっぷり塗ったトーストとコーヒーの朝食を摂り、祐一と一緒に走って学校に行く、その繰り返しだった。

「でも、何で毎日走ってんだ、俺たち…」

学校へと向かういつもの道で何気なく祐一が尋ねたが、名雪の反応もまたいつものようにならなっていた。

「わたしは走るの平気だよ」

「毎朝ゆっくり起きてるヤツが、ヘーゼンと言いな」

「ゆっくりじゃないよ、わたしはいつも通りに起きてるもん」

「じゃ、何でこうして走らなけいけないんだよ」

「何でだろうね？」

真剣に首を傾げる名雪の姿を見て、祐一はそれ以上言う気力を急速に失っていく。

「…まあ、いいけどよ」

確かに名雪は寝坊をしているわけではない。それは祐一にも分かっている。ただ、起きからの動作が相変わらずのんびりしているのだ。まあ、寝坊をしなくなっただのはひとえにげろびーのおかげと言うところなのだが、早く起きようが遅く起きようが、名雪の行動

の速度にはあまり変化がないのだから、これはしょうがないだろう。さすがに秋子さん譲りのマイペースは強力だ。

こうして、名雪たちが学校に着くのは予鈴の直前くらいで、その日もおおむね同じ時間だった。

「今日もだいたい同じ時間だね、祐一」

「できることなら、もっと早い時間にそんな言葉を聞きたいもんだな」

「遅刻はしてないんだから、いいと思うけど…」

「俺はいつも、歩いて間に合う時間には起きてるんだぞ」

「うん、ありがと」

相手の氣勢をそぐことに関しては、名雪は一流である。ちなみに、超一流は秋子さんだが、この際それは置いておくとして、とにかく祐一の氣勢はみごとに打ち砕かれてしまった。

「何でそこで『ありがと』なんだよ…」

苦笑をしながら祐一がつぶやくように漏らすと、名雪はまた笑顔でひとこと答えるだけだった。

「何でもいいの」

その笑顔と言葉に祐一には、返す言葉など見つかるはずもない。

「……ま、いっか」

何がどういいのか、なんてことも分からないまま祐一がうなずくと、名雪も「そうだよ」と、うなずきながら笑う。

『げろびーといっしょ』

はたから見れば、思わず「お前ら何やってるんだ」と突っ込みたくなるような展開だったが、得てして本人たちにはそんな自覚はないものである。もともと、知り合いでもなければ、他人のやり取りなんぞにいちいち気を回したりはしないだろうが、幸か不幸かそんな二人のやり取りをずっと見ていた者が一人だけいたりするのだ。そして、すっかり二人だけの世界を築きつつあった名雪たちに、不意に控えめに声かけられる。

「……あの…水瀬部長……」

その声の名雪たちが振り返ると、そこにはグリーンのリボンの制服のショートカットの女の子が立っていた。

「あっ…平田さん、どうかしたの？」

女の子に向かって名雪が尋ねる。が、その女の子は何となく言いにくそうな気まずそうな表情をするばかりだった。

それまで名雪の横にいた祐一は、その場の雰囲気悪さをこの上なく感じていたのだが、名雪はそうでもないらしい。

「俺は先に教室行ってるからな」

それだけ言い残し、名雪の返事も待たずに祐一はさっとその場から離れていった。

「あっ……」

思わず名雪が情けない声を上げたが、気を取り直してすぐに女の子…平田さんに向かって再度尋ねた。

「それで、どうかしたのかな？」

「…あっ……すみません。あの、新人歓迎会なんですけど、今度の土曜日に決まりました

ので、そのことを伝えようと思っただけです」

慌てながらもちゃんと伝えることは伝えようとする平田さん。彼女はこれでも二年生のまとめ役でもあったりするのだ。ゆえに、こうした幹事役などを引き受けることが多く、次期部長の有力候補でもある。

「うん、分かったよ」

「それでですね、今回は女子だけと言うことで時間を調整してありますから」

「あれ？ 全部一緒じゃないんだ？」

「ええ、男子とは今回は別です。その方が気が楽じゃないかってことで、そうだったんです。それで、部長は三年生の人たちに連絡しておいて欲しいんですけど、お願いできますか？ あんまり日がないし、部活に毎日来る人たちばかりじゃないですから、わたしには連絡つけにくいんです」

三年生ともなると部活一本に絞れる人ばかりではなく、こうした連絡がうまく伝わらないと言うのは事実である。ましてや、上級生の教室を歩き回るのはあまりやりたくないと言ふことは、名雪にも分かっていた。

「うん、それは構わないよ」

「本当にすみません。…それと、部長」

自分の頼みごとをあっさりとは快諾してくれた名雪に対し、べこりと頭を下げて礼を言う平田さんだったが、ふと声の調子が変わった。

「なに？」

「…さっきの人は、部長の彼氏ですか？」

「えっ？　そ、そんなわけじゃないけど……」

突然の平田さんの指摘に、珍しく動揺を見せる名雪。が、このような場合は動揺して否定すればするほど、肯定してるようなものである。

「でも、さっきの雰囲気はまさにそんな感じでしたよ。わたしも声かけようかどうかどうしようか悩んじゃいましたから」

「えーと……」

平田さんの指摘に何と答えていいのか分からないまま、名雪が途方に暮れていると、また平田さんの声の調子が変わった。

「分かっていますよ。部のみんなには内緒にしておきますから。それじゃ」

含み笑いでもしそうな調子で名雪にそっと告げると、平田さんは一礼してから、名雪の前から走り去っていった。そんな彼女の後ろ姿を追いながら、名雪がそっとつぶやく。

「彼氏って……祐一は……」

ちなみにこの時点で、名雪と祐一はすでにそーゆー関係にあるのだが、そんなことをべらべらと喋ったりしないし、学校では以前と変わらないつもりだっただけに、名雪は動揺を隠せなかったのだ。

だが、祐一が転校した時からして、名雪と祐一は一緒にいることが多いし、二人が親類だと聞かされても、それ以上の何かがあることは容易に分かることであつたらう。

「彼氏かあ……」

平田さんが走っていった方向をぼんやりと見つめながら、名雪がそっとつぶやいた。だが、自分の言葉に照れを感じてしまい、慌てて周りを見回したかと思うと、少々ぎこちな

い動作で自分も校舎へと向かった。

その後、教室で祐一に顔を合わせた瞬間、妙に気恥ずかしさを感じてしまった名雪だったが、祐一の方は（何も分かっていないせいもあるが）何も態度に違いがなかったので、名雪の方もすぐに普段通りに戻っていった。

そして、平田さんに頼まれた通りに、休み時間なるとすぐに陸上部の三年女子の一人一人に連絡をしに行った。

「おい、名雪」

三時限目の休み時間もまた他の教室へと向かうべく名雪が机を離れると、それを止めるように祐一の声がかかる。

「何かな？」

「お前、休み時間のたびに、何してんだよ？」

「陸上部の連絡だよ」

「部長ってのは雑用係じゃないんだろ？」

朝に校門のところで出会った二年生に何かを頼まれたのだろう、とは祐一にも察しがついていた。その用件の軽重までは分からないものの、わざわざ名雪がすることなのかという意味で祐一が尋ねたのだが、名雪はそんなことを気にする様子は見せない。

「そんなことは関係ないよ。それに、わたしが頼まれたことだから、ちゃんとやらないとね」

この時、名雪は三年女子全員にわざわざ会いに行ったのだが、要領がいい者なら一人か二人に話したら、後は伝言を頼むだろう。そうした要領の悪さと言うのか人の好きさでも

言うのが、名雪の魅力の一つでもあろう。そして、その魅力を祐一も知っているのだ。

「……たく」

苦笑いしながらそう言った後、祐一は名雪に背を向けながら、ぼそりとつぶやいた。

「昼休みくらいはゆっくりしろよな」

「え？」

名雪が祐一の方をきよんとした表情で見つめていると、祐一は背中を向けたまま、続けて言った。

「だからだなあ……とにかく、先に学食で待ってるからな」

祐一はあえてはつきりとは言わなかったのだが、先に行って待っていると言うのは、祐一なりに「昼は一緒に食べたい」と言う意思表示をしているのである。しかしながら、名雪がそれを察知していたかと言うと、そうでもない。

「うん。でも、先に食べてもいいよ、祐一」

特別な反応を見せることもなく、あっさりと普通に答えただけだったのだ。

「……張り合いがないやつだな」

「ん？ なに、張り合いって」

「何でもない」

かすかに落胆の色すら祐一の表情に出ていたが、名雪はそれには気づいてもその根本的な原因についてはさっぱり見当がつかなかった。

その後、祐一は名雪が来るまで学食でゆっくりと昼食を摂っていたが、名雪が来てからもどこか不機嫌そうにしていた。

『げろびーといっしょ』

「ねえ、祐一？」

「何だよ」

「何だか怒ってるみたいだけど……どうかしたの？」

A定食を載せたトレーをテーブルに置きながら名雪が尋ねても、祐一は不機嫌そうに冷たく答えるだけである。

「別に何でもねえよ」

「そうかな……」

祐一の態度が少なからず気になった名雪だが、それでも箸はA定食へと伸びている。心配ごとと食欲は別物と言うわけではないが、お腹が空いているのはどうしようもない。が、それは祐一にとっては、さらに不機嫌さを増しただけらしく、さっきよりも強い口調で名雪に告げる。

「お前が気にすることじゃないって言ってるだろ」

「うん……分かった」

こんな時の祐一にはそれ以上何も言わない方がいい。経験的にそれを理解していた名雪は、釈然としないもののそれ以上の会話をすることはなかった。

こうして、多少の気まずさを残したまま昼休みが終わってからと言うもの、祐一は自分から名雪に話しかけることなく、時間が過ぎていった。元々、祐一から話しかけること自体がそう多くはないのだが、名雪も話しかけづらさを感じていたのだ。

その日の夜、名雪はげろびーを相手にして、学校であったことの次第を話していた。要するに愚痴をこぼしていたわけだが、げろびーは余計な口を挟まずにしばらくそれに付き

『げろびーといっしょ』

合っていたが、名雪の愚痴が止まった瞬間、

「そりゃあ、ねえちゃんが鈍いつてなもんだぜ」

と、ピツと名雪を指さしながら言った。ちなみに、名雪はベッドの横にあるテーブルにノートを広げている状態で、げろびーはベッドに腰を下ろし、器用に足を組んでいる。

「どうして？」

予習をするもつもりで、名雪は団子のような猫が乗っかっているペンを右手に持つてはいたが、それがノートの上に軌跡を記したのは、三十分以上も前のことだ。

「彼氏の気持ちつてのを考えてみりゃ、すぐに分かるってよう」

「分かんないから、困ってるんだよ…」

「ねえちゃんも意外と朴念仁だな」

「わたしは日本人だよ」

げろびーの言った『ボクネンジン』の意味が分からずに、困ったような表情で名雪が言い返すと、げろびーは手を上に向けながら、あからさまに呆れ顔を見せた。（朴念仁の意味は、無口で人付き合いのない人とか、分からず屋とか言うのが正しいが、ここでは色恋沙汰に疎いと言う意味も含まれている）

「どっちにしても似た者夫婦ってところだな」

「夫婦って…祐一とはそんな関係じゃないよ」

ほんの少しだけ顔を赤らめながら否定する名雪。だが、それはげろびーのひとつことであっさりとは瓦解してしまう。

「でも、らぶらぶなんだろがッ」

『げろびーといっしょ』

これ以上はないくらい短く、そして正確なげろびーのツツコミに、名雪の声が詰まる。

「うにゅ……」

「考えてみりゃ、そんなことで愚痴に付き合ってるオレ様の方が馬鹿みてえだよな。要するにのろけを聞かされてるようなもんだしよ。ふう」

小さくため息をついてから、わざとらしくげろびーは頭を左右に振ってみせる。

「うー……」

名雪としては別段のろけてるつもりはなかったし、結構真剣に悩んでいたりするのだが、話してる相手にそう言われてしまつては返す言葉がない。と言うより、カエルのぬいぐるみ相手に真剣に相談して、挙げ句に茶化されて何も言い返せなくなって終わりと言うのは、この名雪くらいだろう。

言葉を失つたままの名雪がげろびーをじーっと睨むようにしていると、おもむろにげろびーが真剣な表情で口を開いた。

「そんなことよりも、新人歓迎会ってえのは女の子だけなんだよな？」

「え？ う、うん。そうだけど」

突然の質問に名雪が戸惑いながら答えると、げろびーはニヤリと笑いながら続けて言った。

「オレ様も連れてってくれよ」

それを聞いた瞬間、名雪は思わず声を上げていた。

「えー……っ？」

出してしまった後で、名雪は慌てて自分の口をふさいだが、すかさず冷静なツツコミが

『げろびーといっしょ』

入る。

「そんなにでけえ声を出すと、他の連中にも聞こえるぜ？」

それを受けて、名雪は思わず廊下の方に気を配ってみたが、誰かが来そうな気配は感じられない。祐一は風呂にでも入ってるのだろう。

「だって、げろびーが……」

ひとまずは安心したものの、何故か声を落として名雪が反論する。と言っても、それは相手に全然通じていないので、反論とは言わないかも知れない。

「オレ様だってたまにやあ、ねえちゃん以外の女の子に抱いて貰ってえじゃねえか」

「…げろびー、何だか言ってることがエッチだよ…。それに、歓迎会って、駅前のカラオケハウスでやるんだよ」

「大きめのバッグにでも入れてくれりゃ、いいじゃねえか！ ちよつとくれえ押し込められても文句は言わねえからよう」

「ええー…そんな、いくらげろびーでも、この歳になってぬいぐるみを持ち歩くのって恥ずかしいよ…」

「寝ぼけてる時はへーぜんとやってるじゃねえか」

「それとこれとは違うと思う…」

「ま、いいじゃねえかよ、これ一度だけだからよ、なっ？」

「うん……」

その後、げろびーに延々とお願いをされ続けたあげく、名雪はその申し出を受け入れることになったのだが、げろびーがしつこく食いがついてきた理由など、名雪は特別気にな

『げろびーといっしょ』

らなかつた。それ以前に皆目見当がつかなかつた。

げろびーに愚痴をこぼしてからと言うもの、見た目は普段と変わらない生活が続いていた。だが、祐一と名雪の間には、何となくぎこちないものが漂っていた。

祐一にしても、名雪にしても、何か怒っているとか言うわけではないのに、何となく素直に話しづらいのである。それでも、その理由がはっきりせずどこかいらついているようでもある。

そして、それは土曜日になっても変わらなかつた。

4、人気者

『げろびーといっしょ』

「よう、ねえちゃん、今日は歓迎会の日だよなッ？」

「うん…分かってるよ」

元気な声のげろびーに対して、名雪の反応は冷たい。寝起きだと言うせいもあるが、それだけではないことはげろびーには分かっている。

「何でえ、まだ気にしてるのかよ？ そんなに気になるんだったら、とつとと謝っちゃまえばいいじゃねえかよ」

「うん…でも、何を謝るんだろうって、考えたら分かんなくなっちゃって…」

「謝るのにそんな理屈はいらねえんだけどな…。ま、今日はそんなことで悩まねえで、パーッと楽しもうじゃねえかよ！」

両手を広げながらげろびーがそう言うのと、それにつられるように名雪の表情に少しだけ明るさが戻る。

「そうだね。けろびーだって、女の子に会うの楽しみにしてるんだもんね」

「そんな言い方だと、オレ様がスケベヤローみてえじゃねえか」

「違うの？」

「ねえちゃんは男のロマンってものが分かってねえやな」

しみじみとした口調でげろびーが答えたのに対し、名雪はあつけらかなとした表情で笑いながら返す。

「わたしは女の子だもん」

『げろびーといっしょ』

まさしく秋子さん譲りの「無敵の笑顔」である。これをまともに食らってもなお自分のペースを維持できるのは、秋子さんしかいない。ゆえに、げろびーもその時はやはり名雪にそれ以上言い返す氣力を失い、

「そんな意味で言っただけじゃねえって…」

と、力なくつぶやくだけだった。

こうして、珍しくげろびーを打ち負かしてしまった名雪だが、それでも悪意も打算もないのが名雪のよさだ。

「約束通り連れて行ってあげるから、けるびーはおとなしく待っててね」

まだ呆然としてるげろびーを残して、明るくそう言いながら名雪は部屋を出ていった。

そして場面はあつと言う間に変わり、昼過ぎには名雪が帰ってきた。この日は歓迎会のために、練習は早めに切り上げられることになっており、げろびーとの約束もあるので名雪は一度出直すことにしていたのだ。

身支度をすばやくすませ（と言っても名雪のペースなので、実際にはそれほど早くはなっていないが）、げろびーを大きなバッグに丁寧に押し込むと、すぐに出掛けていった。

行き先は駅前にあるカラオケハウスだ。そこは比較的新しい店で、内装がしゃれていることで特に女子高校生に人気が高いのだ。店の方もターゲットをしっかりと意識しているか、ドリンクやフードサービスも割と安めの価格設定がされている。

予約してあった部屋を確認しようと、名雪は一階の受付に向かう。

「あ…平田と言う名前、四時から予約してあると思うんですけど」

受付の男性に向かって名雪がそう尋ねた時、名雪の持っていたバッグがほんの少しだけ

動きを見せた。だが、名雪も受付の男性もそんなことには気がつかず、受付の男性に「部屋は三階の一番奥」と説明されて、中へと入っていくだけだ。

名雪が部屋に入ると、すでに他の参加者は揃っていたらしく、それとなく盛り上がりを見せていた。

「部長、遅いですよー」

「ごめんね、ちよつと家に用事があつて。それで、みんな揃つてるのかな？」

名雪が開口一番に謝ると、その場にいた一人が名雪が持つてる大きなバッグを見つめながら興味津々と言つた風に尋ねてきた。

「水瀬部長お、それ何ですかあ？」

「これ？ う…ん…：わたしが大事にしてるぬいぐるみ…」

いきなりの展開にわずかに戸惑いを見せながら、名雪は馬鹿正直に答えている。どうしてこの場にぬいぐるみを持つてきたのか、と言う質問に対してはまともに答えられないことは分かっているのだが、上手にごまかす方法を考えていなかったのだ。

「えーっ？ 部長が可愛がつてるぬいぐるみですかあ？」

（やっぱりこんなところにぬいぐるみ持つてくるなんて、変だよ。けろびーとの約束なんて、破っちゃえばよかったな…）

相手にどんな風に思われるのか…そればかりが気になっていた名雪は、心の中でそつとけろびーに対して文句を言っていたが、そんなことには構わずに女の子は続けて言う。

「ねえねえ…部長、そのぬいぐるみ見せてくださいよお」

「え…」

持ってきた理由について細かい詮索をされないのは嬉しいが、げろびーを公開するのはほんの少しだけためらいがあった。だが、平田さんにも、

「そうですね、部長もそのつもりで持ってきたんでしょ？」

と、尋ねられてしまうと、それを肯定する以外にすべはない。そうでなければ一体何のために持ってきたのかと訊かれるだけなのだから。

「それはそうだけども…」

「じゃあ、見せてくださいよお」

「汚したりはしませんから」

「うん…」

結局それだけ言われてなおも抵抗するだけの気力も理由もない名雪は、バッグからぬいぐるみを取り出した。

すると、

「わあー、可愛いですねえ」

「へえ、ちよつと抱かしてください」

と、言う具合に予想外にけるびーの人気は高い。

「なんて名前ですか？」

「けるびー…って言うんだけど」

「けるびーですかあ、うん、可愛いですねえ」

などと、名雪の心配などあっさりと吹き飛ばしてしまうほどに、けるびーはその場に馴染んでしまった。

(やっぱりけるびーは可愛いんだ、本当によかった…)

名雪は最近けるびーには会っていない。気がつくと目つきの悪いげろびーになっているのだ。それだけに、みんなに公開するのもためらっていたのだが、そもそもげろびーは自分一人の時にしか出てこないと言うことを、名雪が思い出すと、急に気分も明るくなって行く。

(せっかかくけるびーのまんまなんだから、わたしも久しぶりにけるびーと一緒にいるのも悪くないよね。うん、こう言う場なんだから、わたしも楽しまないとね)

その後は誰ともなく次から次へと歌が続き、「けるびーを抱いている人が次に歌うこと」などと言ったその場のルールも出来上がったたりして、場はますます盛り上がりを見せていった。

そして、盛り上がり始めてから一時間以上たった頃。

すっかり楽しんでいた名雪は、結構汗をかいていたことに気づき、顔を洗おうと思って席を立った。

「あれ？ 部長どこ行くんですか？ 次は部長の番ですけど」

「うん、ちょっと汗かいたから」

「それじゃ、けるびーくんはわたしが抱えますからねっ」

「あーっ、平田さん、ずるいですう」

「早い者勝ちだよー」

一番最初にけるびーに反応を示した女の子と平田さんが、にわかにはけるびーの争奪戦を始めるような雰囲気だったが、

『げろびーといっしょ』

「すぐ戻るけど、大事にしてね」

と、名雪が笑顔で言うのと、すぐ平田さんがそれに応じた。

「はいっ！」

その返事に満足した名雪が部屋から出ていくと、平田さんは嬉しそうにげろびーをぎゅっと抱きしめている。かなり気に入ってる様子だが、実は彼女は大のぬいぐるみ好きで、自分の部屋には相当な数のぬいぐるみが並んでいたりするのだ。

が、その平田さんに抱きしめられていたぬいぐるみに、異変が起こる。

それまでまん丸だった目が急に逆三角形になり、なすがままにされていたぬいぐるみが、するりと平田さんの手から抜け出てしまったのだ。だが、平田さんも他の誰もそれに気がつかなかった。気づく余裕はなかった。

5、事故と奇跡とぬいぐるみ

ぬいぐるみに異変が起こるほんの三秒前に、彼女たちにはそれよりもっと大きな異変が起こっていたのだ。

それは、名雪が部屋を出てからのことだった。

突然建物全体を揺るがすような衝撃と、何かが崩れるような轟音が彼女たちの歌も笑い声もさえぎった。その時、一階の厨房部分でガス爆発が起きたのだが、そんなことなど知り得るはずがない。

「いやぁーっつ」

「え？ 何？ どうしたの？」

「何なのお？」

突然の衝撃に誰もが何をしたらいいのか分からない様子で、きよろきよろと周りを見たり、叫んだりするばかり…要するにパニック状態に陥っていた。

その時だった。

「落ち着けて！ ねえちゃんたちはここで死にやしねえってことは決まってるんだからよ。だから、とつとと非常口から外に出ちまいな！」

げろびーが部屋のドアを開けながら、大声で叫んだのだ。

その瞬間、部屋にいた誰もが言葉を失ったが、一瞬の沈黙の後にみんな一斉にげろびーが指した方向へと向かっていった。極限状態の中では、ぬいぐるみがしゃべっていることに疑問を抱くような余裕などなかったのだ。

彼女たちがいた部屋は三階の奥で、厨房部分からも離れていた。つまり、避難口に近く、比較的安全な場所だったのだ。しかし、名雪が向かっていた洗面所は厨房からそう離れていない。真下の階ではないと言うものの衝撃は凄まじく、床の一部も崩れてしまっていた。爆発があった瞬間、名雪は何が起こったのかさっぱり分からなかった。突然建物が激しく揺れ、その勢いで洗面所の奥の方に倒れてしまい、ふと気がつく、床に空いた穴から（要するに階下から）激しく火柱が上がっている。

「こんなところで死にたくないよお…、祐一にちゃんと謝ってないし、お母さんのジャムが食べられなくなるのもイヤだし…：げろびーともお別れなんかしたくないのに…」

突然のできごとにとんび座りのまま半泣きになっていると、そこに聞き慣れた声が届いた。

「誰がお別れするってえ？」

それは紛れもなくげろびーの声だった。しかし、名雪のいる場所からは、床の穴から立ち上がる炎が見えるだけで、姿を見ることは出来ない。

「げろびー！」

ひととき大きな声で名雪が叫ぶと、こともなげにひよいと炎を越えてカエルのぬいぐるみが姿を現し、ピツと指を立てながら言った。

「ふう、やっぱりねえちゃんはトク臭えな。他のねえちゃんたちはちゃあんと逃げたつてえのによう」

炎を間近にしながらかも、いつもと変わらないげろびーの言葉につられるように、名雪がかすかに笑みを浮かべる。

『げろびーといっしょ』

「そんなことないもん」

「そら、早く逃げねえと、本当におしめえになっちまうぞ」

「うん……でも……恐くて動けない……」

げろびーが来てくれて、いくらか名雪も怖さを感じなくなつたものの、足はまったく動く気配を見せてくれなかつた。どうやら、最初の衝撃で完全に腰が抜けてしまつたらしい。

「そんなこつたらうと思つてたぜ。昔からねえちゃんは恐がりで泣き虫だつたからよ」

「昔からつて……そんなの知らないよ」

「ま、ここはオレ様にまかせておけ。なんつたつて、オレ様はカエルだからよ」

げろびーは余裕の表情を見せているが、火柱の勢いは先ほどから一向に収まる気配を見せない。

「燃えちゃうよ」

げろびーの自信の根拠が分からない名雪が短く否定すると、げろびーはニヤリと笑いながら答えた。

「そう思うんなら、オレ様の体に触ってみなつて」

その言葉の通りに名雪がそつとげろびーの体に触れると、見た目は濡れてるように見えるなかつたのに、げろびーの体はひんやりとしていた。

「冷たい……」

ほつりとつぶやくように名雪が漏らすと、げろびーはそつと名雪に寄り添うようにながら口を開く。が、それはいつもの乱暴な口調ではなく、少しゆっくりとした、諭すよう

なしゃべり方だ。

「神様ってのは本当に気まぐれでよ、オレ様にちよつとした力もくれたのよ。だから、オレ様に触ってる限り、ねえちゃんに火が移ることはねえんだ」

「そう…なの？」

自分に覆い被さるようになったげろびーに対して、名雪が上目遣いで小さく尋ねると、げろびーは笑って答えてみせる。

「ああ、任せときなつて」

「でも、火がそこまで来てるよ？」

「でえじょうぶだ。なんつったつて、オレ様はぬいぐるみだからな。熱さも痛さも感じることはねえんだ」

熱さも痛さも感じないと言ってるが、一番最初にぬいぐるみが見がしゃべった時の言葉を名雪は忘れてはいなかった。あの時、げろびーは「痛えじゃねか」と自分に向かって叫んだはずだと。

それに、こうして話してるわずかな間にも火の勢いが増していき、げろびーのすぐ後ろにまで火が迫っているのだから、熱くないなんてはずはない。そう思うと、一度は止まっただけの涙が名雪の瞳からあふれてしまう。

「でもっ…でもっ、けるびーがっ」

「泣くなつて」

顔を伏せると名雪は、それまで握っていたげろびーの腕の部分を、さらに強く握りしめながら、嘯みしめるように答える。

『げろびーといっしょ』

「無理だよ…」

すると、げろびーは小さくほそりとつぶやいた。

「オレ様はあの人の涙も見てるからよ、ねえちゃんの涙は見たくねえんだ…」

その声は今までのげろびーの姿からはまるで想像できないくらいに、弱さと悲しみを含んでいた。だが、名雪が何かを言おうとするより先に、げろびーは普段の調子に戻って言葉が続けた。

「それによ、まだ話せるウチに話しておかなくちゃならねえことがあるんだ。いいか、ねえちゃんよお」

「う、うん」

「あの祐一ってやつのことだけだよ、ちよいとひねくれたところがあるけど、なかなかイイやつだと思っぜ。だから、どう謝ったらいいか分からねえなんて言わねえで、何も考えずに言いてえことは言っちゃまいなって」

「で、でも…」

「ねえちゃんのことをちゃんと受け止めてくれるやつなんだろ？ あの祐一つてのはさ。少なくともテメエがそう思ったら、そんなことでいちいち悩むもんじゃあねえぜ」

「う、うん……」

「ま、あんたもあの人の娘だ。そこいらの一番大事なところは分かっているんだろうけどな」

と、立って続けにしゃべった後、げろびーは小さく笑いながら、そとつぶやいた。

「じゃあな…」

『げろびーといっしょ』

短く告げられた言葉に思わず名雪は顔を上げて、自分の目の前にあるぬいぐるみの名前を呼んだ。

「え？ げろびー？」

だが、返事は何も無い。

「げろびー？ どうしちゃったの？」

相変わらず周りの火勢は衰えていなかったが、名雪はそれによる熱さも息苦しさも感じてはいない。しかし、自分が抱いているぬいぐるみを揺らしてみても、それが何かの反応を示すことはない。

「ねえ、何か話してよ、げろびー！ げろびーったらあー！」

その後、名雪がいくら呼んでも揺らしても、ぬいぐるみが答えるようなことは、なかった。

6、奇跡のあと、夢のなか

火勢が弱まってから消防隊員が三階を見回った時、ぼろぼろになった何かを大事そうに抱えていた名雪が発見された。

不思議なことに名雪がいた場所には、近くを通っていた配水管から水が吹き出っていて火が回らなかつたらしく、すすなどで汚れてはいたものの名雪は火傷の一つもなく、名雪を発見した消防隊員を驚かせていた。また、この日の事故では一階の厨房では負傷者が多かったものの、客の方はほとんどが軽い火傷程度ですみ、翌日の朝刊には「奇跡的」と言う言葉が目立っていた。

『駅前ビルでガス爆発』か……

テーブルの上に置かれた朝刊をぱっと見て祐一がつぶやいた。と、そこに秋子さんが姿を見せる。

「おはようございます、祐一さん。今日は早いですね」

「あ、秋子さん、おはようございます……あの、名雪は？」

「まだ寝てるみたいだけど、今日はそっとしておいた方があの子のためですから」

そう答える秋子さんの表情はいつもと変わらぬ笑顔である。

「そうですね。あいつも遅くまで起きてたみたいだし、今日ぐらいはゆっくり寝かせておいてもバチは当たらないでしょうからね」

祐一も屈託のない調子で秋子さんに答えて、いつもよりゆっくりと朝食を摂り、昨日の出来事がうそのような平和な日曜日を満喫することにした。

『げろびーといっしょ』

その頃、名雪はまだ夢の中にいた。遠い遠い夢の中に

誰かの声がある。お母さんとは違うけど、暖かくて優しい声。

『ほら名雪、前から約束してたぬいぐるみだよ』

『よかったわね、名雪』

『あけてもいい？』

『ああ、それは名雪のなんだから、構わないさ』

『ほんと？ やったあ！ それじゃ、あけるね』

包みを開けると、そこにはわたしをにらみつけているカエルがいた。

『う……………』

『どうだい？』

『名雪、どうしたの？』

『…カエルさん…なゆきのこと……………おこってる……………』

『怒ってる？ そんなことはないだろ？』

『ちょっと目つきがきついんじゃないかしら？』

『そ、そうかな？』

『…おこってるよお…だって、ずっとみてるんだもん……………』

『結構愛嬌がある顔だと思っただけだなあ』

『でも、こわいもん……………いまだって、じっとみてるし……………ぐすつ』

目つきのきついカエルのぬいぐるみ、それが包みの中身だった。でもわたしにとっては、にらみつけてるようにしか思えなかった。

『げろびーといっしょ』

『そんなに恐いかなあ…。ほら、ちよつと抱いてみてごらんよ』

『…うぐつ…すひつ…うわああああああん』

『わああっ！ 名雪、ごめんっ』

『大丈夫よ、名雪。そのカエルさんは名雪のことを怒ってるわけじゃないの』

『えぐつ…だつてだつて…ぐすつ…にらんでもん』

『それはね、あなたのことを怒つてにらんでもんじゃなくて、照れてるのよ』

『ぐしつ…じゃつ…あ、…ぐすつ…どうして？』

『名雪に会えて嬉しくてたまらないんだけど、それを素直に出さないうでわざと恐い顔をしてるだけなの』

『…すなおじゃないんだね』

『そうね。それにね、このカエルさんはお父さんがずっと前から約束していたのに、なかなか名雪に会えなかったから、もし怒つてるとしたらそれは名雪にじゃなくて、約束をずっと守ってくれなかったお父さんに対してでしょ？』

『…それじゃ、なゆきのことはおこつてない？』

『ええ、もちろんよ』

『秋子…それじゃ僕の立場が…』

『…おとうさんのこと、おこつてるの？』

『そうかも知れないわね。でも、名雪がカエルさんのことを大切に可愛がつてくれるなら、カエルさんもお父さんのことを許してくれるんじゃないかしら』

『…そうしたら、カエルさんもわらう？』

『げろびーといっしょ』

『ええ。名雪が可愛がってくればね』

『それじゃあ、なゆき、カエルさんたいせつにするっ』

『そう、それなら名前をつけなきゃね』

『そうだなあ。カエルだから、フロツグとかね』

『…ろっ…？ それ、なあに？』

『今ひとつかなあ…。じゃあ、カエルの鳴き声のゲコゲコとかね』

『カエルさんはゲロゲロなくんだよ』

『ゲロゲロかあ？ それはちよつと可愛くないなあ』

『じゃあ、「げろびー」にするっ』

『え？ 名雪、本気かい？』

『うんっ、なきごえをかわいくさせたの。いいでしょ？』

『ええ、素敵な名前ね』

『でしょっ！ それじゃカエルさんのなまえはげろびーだよっ』

そうして、目つきの悪いカエルのぬいぐるみはげろびーと言う名前に決まった。わたしはそれから言うもの、げろびーを大事にしていた。早くお父さんのことを許してくれるよう、笑ってくれるように願いながら。

でも、そのげろびーがお父さんのことを許してくれるより先に、お父さんがいなくなっ
てしまった。そして、それからしばらくして、げろびーもなくなっってしまった。

わたしがずっと抱いていたせいもあって、随分と汚れていたげろびーをお母さんが洗っ
てくれたのだけど、干してあった場所から、いつの間にかなくなっていたらしい。

『げろびーといっしょ』

げろびーがいなくなっちゃった。

おとうさんもいなくなっちゃったのに。

げろびーがいなくなっちゃった。

まだわらったかおをみていないのに。

げろびーがいなくなっちゃった。

わたしを助けるために、ぼろぼろになっちゃった。

げろびーがいなくなっちゃった。

まだ聞きたいことがいっぱいあったのに。

げろびーがいなくなっちゃった。

でも……最後にげろびー……ほんのちよつとだけ、笑っていた。

ごめんね、げろびー……それと、ありがとう……。

7. 夢のあと

水瀬家の朝は、秋子さんから始まる。

家族の中で一番早く起きて、洗濯に掃除に朝食の支度までも完璧にこなし、家事やつれなど微塵も感じさせないのだから、主婦のかがみとも言える存在である。

秋子さんが一通りの家事をこなし、朝食の準備にかかっている頃。

いつものように、名雪の部屋では目覚ましのオンパレードが開始される。

『ジリリリ…』

と、無機的かつ面白みのない音が響いたかと思うと、

『ピピピッピピッピッピッ…』

と、これまた面白みのない音が続く。

だが、その後はいつもとは違っていた。ゴソゴソと何かが動く気配の後に、目覚ましの音が順に止められていくと言うのが、ここ三日ほどの状態なのだ。

そして、祐一がダイニングに顔を出す頃には、名雪はすでに朝食を終えようかと言うところで、秋子さんにさえ、あいさつよりも先に、

「あら、今日も祐一さんの方が遅いのね」

と、言われてしまったりするのだが、もちろん秋子さんに悪意はない。

「あ、秋子さん。おはようございます」

「おはようございます、祐一さん」

笑顔で答えながら秋子さんが差し出してくれたトーストとコーヒーを受け取り、祐一が

『げろびーといっしょ』

テーブルについた。

まだ眠たそうな目つきで、トーストにジャムを塗りつけている祐一を見て、名雪が口を開く。

「祐一は夜更かしし過ぎなんだよ」

珍しく早起きが続いてるだけに、名雪の言葉は祐一にとっては痛いことこの上ないものだ。それだけに、祐一が何も答えずにいると、助け船のごとく秋子さんが名雪に向かって尋ねた。

「名雪の方はこれで三日目だけど、何かあったの？」

「別に何も無いよ、お母さん」

「嬉しいような、ちょっと寂しいような、何だか複雑な心境ね」

顔に手をそっと添えながらの秋子さんの微笑み。いつもと変わらないしぐさではあるが、言葉通りに寂しさがほんの少しだけ含まれていた。

「そうそう。名雪、そろそろいつものお前に戻った方がいいぞ」

トーストを口に運びながら祐一がそう言うのと、名雪は実に平然と答える。

「いつもって、これがいつものわたしだもん」

「うーん……けるびーを抱えて寝ぼけていた日が懐かしい……。そうだ！名雪、今度でつかいカエルのぬいぐるみ買ってやるから、それでゆっくり寝ろ！」

げるびーのことを祐一は全然知らない。ゆえに、このような言い方になっているのだが、もし知っていたら「買ってやる」とは言わなかったろう。でも、それが祐一なりの気遣いであることは、名雪には通じていた。

「げろびーはいんだよ、祐一」

「いって…お前、この前の火事の時になくて、それっきりだろ？」

「うん。けど、本当にいいの」

「どうして？」

「げろびーとげろびーは、いつもわたしと一緒にいるもん」

わずかに怪訝そうな祐一に向かって、名雪は笑顔とともに答えてみせた。

「何だよ、そりゃ？」

「祐一には分かんなくていいことだよ。それに、あの大きさのぬいぐるみって結構高いんだよ？」

なおも怪訝そうな祐一だったが、楽しそうに笑う名雪の言葉の後半に顕著な反応を示した。

「そっ…そおかあ！ 名雪はもうぬいぐるみはいらないかあ！ いやあ、残念だったなあ、はははっ」

やや大きな動作とわざとらしい言動を見せる祐一。その行動の理由を承知の上で名雪がさらに続ける。

「買ってくれるんじゃないの？」

「いやあ、お前がいらなくて言うなら、無理にとは言わないよ、俺はっ」

なおも大きな動作をする祐一を前にして、不意に名雪が笑う。

「あははは、祐一、ありがとね」

「何だよ、唐突に…」

「何でもいいじゃない、ね？」

わけがさっぱり分からないと言った様子の祐一に対して、何もかも分かっているような名雪の様子は、普段の二人から考えると正反対とも言えるくらいである。

と、そこに秋子さんの声。

「二人とも、時間はいいの？」

「あつ、いけね！」

「そうだね」

秋子さんに言われて時間を確認してみると、二人が思った以上に時間が過ぎていたらしい。名雪が早起きしていたのにも関わらず、結局はいつもと変わらない朝の風景が、そこにはあった。

「やれやれ、やっぱり俺たちってこう言うことに決まってるのかな？」

「一人で歩いて行くよりは、二人で走った方が楽しいよ、きつと」

「ま、それもそうだな」

事故の後、名雪が祐一にあらたまつて謝るようなことはなかったが、祐一も名雪もわだかまりはなくなっていた。そうなることが、一番自然であるかのように。

「それじゃ、お母さん、行ってきますーす」

「じゃ、行ってきます」

「はい、気をつけて、行ってらっしゃい」

そして、いつものように二人そろって玄関を出て行った。いつもの名雪と祐一のまま。

8. 雲の上のハナン

玄関で見送った秋子さん以外にも、いつものようにそろって走る二人をじっと見つめる者がいた。しかし、それは物理的な法則を完全に無視した位置にいるので、走ってる二人はもちろん秋子さんでさえ、その存在に気づくことはない。

名雪たちを見つめていたのは、目つきの悪いカエルのぬいぐるみと、優しい目をした一人の男だった。

「ヤレヤレ、あのねえちゃんも相変わらずだし、これでよし、だよな？」

目つきの悪いぬいぐるみが、そう言いながら傍らにいる男に向かって問いかけると、男はかすかに笑いながら、それに答える。

「ああ、そうだね、本当にお疲れさま」

「にしても、アンタも馬鹿なやつだよねえ。せっかく気まぐれな神様が願いごとを叶えてくれるってえのによ、よりによって『娘の行く末がどうなるか知りたい』なんて、つまりねえことを言っちゃまうなんてな」

「そう言うキミこそ、好き者じゃないか。神様が『あの子は近く大事故に巻き込まれる』なんて言ったら、『そんじやオレ様の願いはそれを回避することだな』って即答していたんだからね」

「そりゃあ、ねえちゃんに可愛がられたぬいぐるみとしては、当然と云うものだけ。巻き添えにしちまった本物のげろびーにや申し訳ねえけどな」

「いや、それは大丈夫だろうさ。キミがそう思ってくれたように、げろびーも同じように

思ってくれたさ」

「アンタは本当にめでてえやつだな」

「ははは、あんまりおめでたいんで、こんなところにいる始末だけどね」

男が声を上げて笑い出すと、不意に彼らの後ろから別の声が出た。

「こんなところ…は、ないでしょう」

涼しい顔のまま近づいて来る声の主に向かって、ぬいぐるみがことさら皮肉を込めて言い返した。

「おや？ 誰かと思ったら、ヒマを持って余してる気まぐれ神様じゃねえか」

「言いますねえ、あなたも。でも、天国にいて、こんなところはないと思いますよ」

「あはは、別に悪い意味で言ったんじゃないんです」

「よせよせ、この神様は分かっているくせに、こうして人をいじめるだけなんだからよ
お」

それぞれに悪意がないのは、みんな承知の上である。神様にしても、男にしても、ぬいぐるみにしても、分かかって言葉のやり取りを楽しんでいるのだ。

「おやおや…。まあ、わたしは神様と言っても、大した力もない下っ端ですからね」

「そのくせ、人の運命を変えたりはしてるじゃねえか」

「ああ、今回のことをばらしてしまうとですね、あの子は事故に巻き込まれるけど、別に命に関わるような事態には至らないことは決まっていたんですよ」

「なに！ そんなじゃ、オレ様のやったことは無意味だってえのか？」

涼しげな神様とは正反対に、ぬいぐるみは感情をあらわにして神様ににじり寄った。

「いえ、そんなことはありません」

「それでも、神様の方じゃ決まっていたことなんだろう？」

「それはそうですけど、実際にあの子がどのような形で事故に悶わるか、どのように助かるかと言うのは、さまざまな要素が複雑に絡んでいる訳でして……」

と、そこで神様は困ったような表情を見せた。すると、ぬいぐるみも語気を和らげてる。

「だから？」

「もしかししたら、あの子は命は落とさなくても重傷を負うかも知れなかったのですよ」

「その辺は神様の匙加減じゃねえのかよ？」

「一人一人の細かいことまで、すべて決められているのではないのです。それにわたしはそんなに強い力を持つてはいませんしね」

苦笑混じりに神様が答えると、今度はぬいぐるみに代わって男の方が尋ねてきた。

「じゃあ、どうして今回みたいに、あの子を助けることが？」

「あなた方がそれを望んでいたからですよ。先ほども言いましたが、わたしは物事に対してその方向をちよつと変えるくらいしか出来ないのですよ」

神様の返事を聞き、ぬいぐるみが器用に腕を組みながら、しみじみと言った風につぶやいた。

「意外と情けねーんだな」

「ええ、そうですね。だからこそ、あなた方の強い想いと言う力を、その想いに沿った方向に進むようにしたんですよ」

と、神様が笑みを浮かべながら、ぬいぐるみのつぶやきを肯定すると、ぬいぐるみはおもむろに両手を広げながら、ひときわ大きな声で返した。

「はっ！ 道理でいきなり『あなた方の願いを叶えます』なんて言ってきたワケだ。ハナツから、オレたちがそう言う願いをすると分かってたんだ」

「まあ、それでも神様ですからね。それに、わたしは力がないので、まだ楽な方ですか」

「へえ、力を持つと苦勞も増えるのかよ？」

「わたしの上司は、ある約束を狐と交わして、彼らに特別な力を与えたのですが、それが狐たちにとって必ずしも良いことではなかったと悔いてますよ。それでも、一度与えてしまった力を、後悔してるからと言って取り上げることは出来ないし、一概に不幸ばかりを招いたと言うわけでもないの…まあ、つらいところですよ」

「神様にも失敗はあるのかよ」

「神様と言っても、あなた方とそう変わらないんですよ。わたしだって、もっと上の神様によって生み出された存在に過ぎませんからね」

「ふうん…お氣樂に見えるけど、神様も結構大変なワケだ」

「代わってくれますか？」

「いやいや、オレ様は今そのままがいいし、気まぐれ神様が一人くれえいた方が世の中のためにはなるんじゃないかねえか？」

「代わってくれないのですか…。それは残念です」

「ま、そんなことを言わずに、神様も一緒に楽しいことでもしねえか？」

『げろびーといっしょ』

「楽しいこと、それはいいですね」

「さっきまであの子の昔話で盛り上がってたんですけどね」

「それと、このおっさんの出来過ぎたカミさんの話な」

「へえ、カミさんですか。わたしも神様としては、興味が尽きませんね」

「ちょっと寒いぞ、神様よう」

「まあ、いいじゃないですか。わたしは世俗的なことには疎いんですから」

「そんなのに詳しい神様もちょっとイヤだけだな」

「あははははは」

と、まあ、ぬいぐるみと男に気まぐれな下っ端神様を加え、楽しい話が延々と続いて行くことになるのだが、ひとまず、この話はこれまでと言うことで。

『げろびーといっしょ』あとがき

さて、念のために説明をしておきますが、物語の時期は三年生の四月頃で、名雪はまだ陸上部の部長で、祐一とはらぶらぶな関係にあると言うことになっています…。なので、要するに名雪シナリオの後の物語と言うことになります。と言うことは、当然私が書いている真琴のシリーズとはまるっきり関係がないことになるので、その辺はお忘れなきように。

で、物語の方ですが……当初はバリバリのコメディを書くつもりだったのです。でも、ふと名雪パパのことを考え始めたら、こんな風な話になってしまったのです……。何ででしょうかねえ？ まあ、話そのものは特に凝ったネタでもなく、書いてる時の乗りもかなりの乱高下がありまして、もしかしたらめっちゃくちゃな作品になってるかも知れないですけど……まあ、要するに、秋子さんの周りにはこうしたメルヘンがいっぱいなんだなど言いたいワケです。

この辺は、秋子さんの職業にも関係あるんですけど、それについてはまた別の作品で触れてみたいと思います。（こうした設定は私の作品では共通事項になっているので、真琴の話にしても他の話にしても、秋子さんの職業は同じ設定です）

一九九九年九月十六日 記

『げろびーといっしょ』

.....
1999/09/16 初版 ash

2002/04/14 修正 ash

PDF書式変更:2016/05/22

.....